



れんけい

題字：松尾信彦書

2020年4月1日より、気胸センター開設

呼吸器外科 院長補佐 青江 基

～より身近で、確実な気胸疾患の受け入れ口を目指して、県立中央病院での窓口を一本化します。～

近年、疾患を取り扱う診療科が複数に渡る場合、疾患センターを作って、関係診療科が協力して、患者さんの迅速な受け入れ、診療をおこなう体制を作っていました。特に、緊急性の高い疾患については、すでに当院では循環器センター、脳卒中センターなどが、専用外線電話をもって、院外の先生方からのご紹介に対応しています。

今回、迅速な対応が必要な疾患である「気胸」についても、救急外来、救命センター、ICU、HCU、呼吸器内科、呼吸器外科、リハビリテーション科などの協力で、自然気胸、続発性気胸をあつかう、気胸センターを立ち上げることとなりました。

気胸センター専用の外線電話を下記のように運用開始いたしますので、ぜひ、ご利用いただければと思います。よろしくお願いします。

専用電話番号：087-802-1198

運用時間：毎週月曜日から金曜日の午前8時30分より午後5時15分まで

上記時間外については、従来どおり、時間外受付、救急外来で受け付けますので、県立中央病院の代表番号にご連絡いただければと思います。

脳腫瘍センターを設立しました

脳神経外科 診療科長 市川 智継

脳腫瘍は、脳という人間の尊厳に関わる重要な臓器に発生するため、生命のみならず、身体機能の面でも、患者さんの生活に大きく影響してくる疾患です。

治療においては、繊細な脳の機能を護りつつ腫瘍をコントロールするという相反する命題を両立させなければならず、脳神経外科手術のみならず術後の放射線治療や化学療法も含み集学的な治療が必要です。

当院には、豊富な脳腫瘍治療経験を持つ医師が在籍し、手術に関しては脳腫瘍手術に必須の神経ナビゲーションシステムや、神経内視鏡、電気生理モニタリングシステムなどの最新の設備を取り揃え、また、高度な技術を要する覚醒手術を行えるチームも立ち上げ、最先端の脳腫瘍手術を行うことができます。

放射線治療装置は、定位照射、IMRT など、正常組織への影響を最小限にしつつ腫瘍のコントロールを良好にしています。また、脳腫瘍の場合は、悪性腫瘍のみならず、良性の腫瘍でも手術摘出が困難な頭蓋底腫瘍などに対しても放射線治療は有効です。化学療法に関しても、最新のエビデンスに基づくレジメンを用いて専門病棟（クリーンルームあり）で行っています。

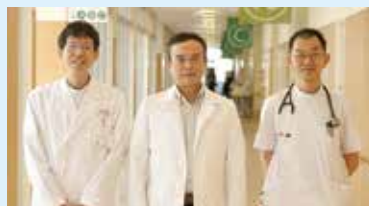
このように、近年の医療の進歩により脳腫瘍の治療は益々高度で専門的になっており、各患者の治療は複数の診療科にまたがって行われます。そこで私たちは、脳腫瘍センターの設立により、診療科間の連携を強めて脳腫瘍に特化した診療体制を構築しました。これによって、香川県におけるがん医療の中核的病院として、香川あるいは四国在住の患者さんに、安心して専門的な脳腫瘍治療を受けていただけるチャンスを広げたいと願っています。

■対象とする脳腫瘍は、良性・悪性を問いません。

原発性脳腫瘍

良性脳腫瘍：髄膜腫、下垂体腺腫、聴神経鞘腫、頭蓋底腫瘍、頭蓋咽頭腫、脳室内腫瘍、など

悪性脳腫瘍：グリオーマ、悪性リンパ腫、など
転移性脳腫瘍



脳腫瘍センターのメンバー
脳神経外科
市川智継（センター長）
血液・腫瘍内科
川上公宏
放射線科
片山敬久

外来診療表

脳腫瘍センター外来は、月水金に行っております。治療を希望される患者さんがおられましたら、地域連携室あるいは、脳神経外科ホットラインを通して受診のお申込みをお願いいたします。脳腫瘍はときとして症状の進行が速いので、迅速に対応いたします。

	月	火	水	木	金
午前	市川（脳外科） 片山（放射線科）		市川（脳外科） 片山（放射線科）		市川（脳外科） 川上 （血液・腫瘍内科） 片山（放射線科）

退職のご挨拶



副院長兼看護部長 高島 小百合

この3月31日で中央病院を定年退職させていただきます。思い起こせば39年間県立病院に就職し、看護の道をまっしぐらに走ってまいりました。わずか1年という短期間の副院長兼看護部長でしたが、新病院移転後、念願の緩和ケア病棟を10月開設することができました。これで新病院になって昨年度のHCU開設と合わせて県民の皆様とのお約束をやっと果たすことができたことを嬉しく思っています。

中央病院は高度先進医療を提供し、県民医療の最後の砦としての使命をこれからも全うしなければなりません。質の高い看護の提供をするために看護部ではBSCという手法を用いてマネジメントをして参りました。成果は少しずつではありますが、手ごたえを感じています。

次年度には入退院支援センターの運用開始など、やるべきことはまだまだ山積の状態であると自覚しています。県民の皆様様の幸せのために中央病院がなすべきことを当たり前に実践できる、そういう組織作りをこれからも推進しなければなりません。

地域医療機関の皆様には、ご不便やご迷惑をおかけしています。少しでも皆様の信頼に足り得るよう職員一同頑張ってくれることを期待し、退職のご挨拶とさせていただきます。

退職のご挨拶



臨床工学部 技師長 山下 和良

地元、香川に帰って就職したい！香川で一番大きな病院に就職したい！そう思い、昭和56年に香川県職員として就職しました。

39年間の内、23年間は中央病院 検査部で臨床検査技師として、16年間は臨床工学部で臨床工学技士として働き、多くの方々に助けられ、ご指導いただき、定年まで勤めることができました。

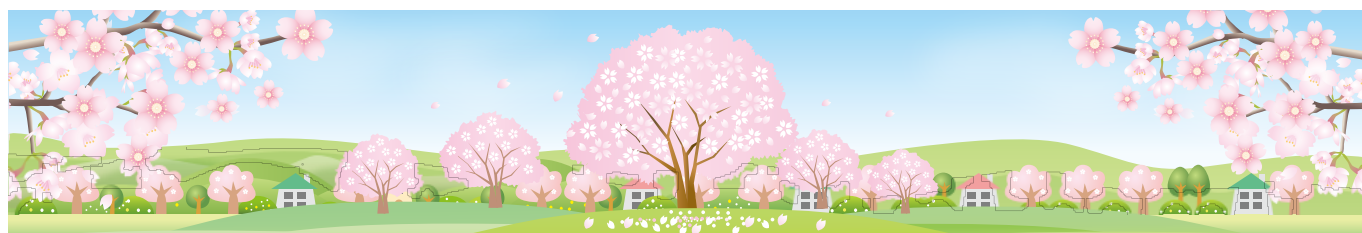
また臨床工学部では責任ある立場で、優秀で楽しい部下のもとで業務ができたことは本当に幸せでした。

香川県立中央病院の益々の発展をお祈りしながら、私自身は次の人生に向かって、もう一度スタートを切りたいと思っています。

今後は、香川県に暮らす一人として皆様方のご健康とご健勝を心よりお祈りし、中央病院を応援してまいります。

長い間多くの皆様にお世話になり心より感謝しております。本当にありがとうございました。

今後とも中央病院 臨床工学部をご指導、ご支援くださいますようお願い申し上げます。



医師の人事異動 ● 転出 (3月31日付)

青山 祐樹 (消化器内科)	岡田 尚大 (消化器・一般外科)	宗政 修平 (泌尿器科)	藤木 貴宏 (研修医)
河井 裕介 (消化器内科)	川名 伸一 (呼吸器外科)	合田 衣里奈 (眼科)	安富 苗波子 (研修医)
谷口 綾乃 (消化器内科)	土生 智大 (呼吸器外科)	増井 正典 (歯科・口腔外科)	山下 和貴 (研修医)
平野 佑一 (消化器内科)	吉岡 遼 (乳腺・内分泌外科)	岸本 司 (歯科・口腔外科)	横北 沙織 (研修医)
原田 圭 (消化器内科)	劔持 直也 (脳神経外科)	岡崎 香織 (麻酔科)	藤村 亮 (研修医)
伊藤 太一 (呼吸器内科)	井上 洋一 (整形外科)	奥村 澄枝 (麻酔科)	三好 由佳 (研修医)
岡田 梨乃 (腎臓・膠原病内科)	野網 淳 (形成外科)	吉尾 浩太郎 (放射線科)	石田 智也 (研修医)
多屋 慧 (循環器内科)	平野 恵理子 (形成外科)	綾田 善行 (研修医)	雑賀 将斗 (研修医)
松田 直樹 (消化器・一般外科)	水尾 杏海 (小児科)	岡本 宗一郎 (研修医)	

NEWS

災害対策・ブラックアウトシミュレーションを 看護部で行いました

副看護部長 丹羽 美裕紀

看護部では看護師が災害時に対応できるように、様々な取り組みを行っています。その一つとして今年度はブラックアウト（完全停電）を想定したシミュレーションを行いました。

病院では電力を使用して様々な医療や看護を行っています。その電力の供給が完全に止まってしまった場合、どのように患者さんの安全を守るかについて考えました。まず病院の電気がどこから供給されているのか、完全停電になると病院の機能がどうなるか、医療機器の充電や機能について勉強しました。その知識を踏まえて各病棟・外来において完全停電になると具体的に何が困るのかそしてどう対応するのかについて話し合い、緊急時の行動指標を示したアクションカードを作成しました。そしてアクションカードをもとに、各病棟・外来でシミュレーションを行いました。完全停電は全く初めての想定なので、とってもドキドキしていたスタッフたちですが、実際に動いてみると事前に学習していたお陰でスムーズに動けました。患者さんの安全を確認し「心配しなくていいですよ」と声をかけ、医療機器の確認をしていました。シミュレーション後の振り返りでは、「常日ごろから停電時の対応を考えておくことが大事」「停電が続くとどうなるか心配だが、その心配毎を言語化して一つ一つ解決していくことが大事」という前向きな意見が出ました。

次年度は「病院全体で取り組む必要がある」という課題を実現していきたいと思っています。



information

治験管理室のご紹介

薬剤部 沖上 朋美

治験管理室は臨床研究支援センター内にあり、治験の管理業務および治験審査委員会（IRB）の事務局業務、また、製造販売後臨床試験の支援などを行っています。メンバーは、センター長（医師）、副センター長 3 名（医師）のもと、薬剤部長、事務局担当薬剤師（兼任）、事務員（1 名）からなり、また臨床研究コーディネーター（院外 CRC）も在籍しています。

当院では、肝臓内科（肝がん、NASH など）、循環器内科（ACS、心不全など）、消化器内科（IBD 関連）、神経内科（認知症など）、整形外科、婦人科など、現在 40 件を超える治験を実施しています。外部委員の先生方を交えて毎月開催している IRB では、治験実施計画書（プロトコル）等に基づいて治験の倫理的、科学的な妥当性を審議し、安全性の評価を行い治験継続について審査します。治験を進めていくにあたっては、プロトコルに従って円滑に実施できるよう、治験薬の管理、各種事務手続き、モニタリング・監査等への対応、また院外 CRC と協力して各部署との連携・調整などの業務を行っています。

最近は、国際共同治験の増加や、GCP 省令（治験のルール）の厳格化などによって、医師や CRC、事務局を含め各部署の業務が煩雑さを増しています。有効で安全な医薬品を、必要としている患者さんに少しでも早く届けるために、院内外の連携を深め、チームで取り組んでいきたいと思っています。



緩和ケアセンター便り ～架け橋としての緩和ケア～

緩和ケアセンターGM（ジェネラルマネージャー） 西山 美穂子

はじめまして、緩和ケアセンター（Palliative Care Center）です。
2019年4月、10西病棟内の一隅に「緩和ケアセンター（PCC）」が設置されました。

PCCは院内の緩和ケアに関する「ハブ」の役割を持ち、すべてのがん患者さんやご家族等に対して、診断時から迅速かつ適切な緩和ケアを、切れ目なく適用することを目標としています。

2019年は、10月の緩和ケア病棟開棟に向けての情報の集約、整理、準備を主に行ってきました。2020年は緩和ケアチームを中心に専門的な緩和ケアの質の向上と提供体制の整備を図っていききたいと思います。

4月から「れんけい」に連載をさせていただくことになりました。PCCにはいろいろな職種がいます。いろいろな視点からのよもやま話にお付き合いください。

よろしくお願いします。

副題の～架け橋としての緩和ケア～とは近代ホスピスの母と言われるシシリー・ソンダーズ博士が1997年の来日時に講演された時の言葉です。私達も緩和ケアを必要とされる人たちの架け橋になれるよう努めていきたいと考えています。



緩和ケア病棟から見た瀬戸内海



お通じにまつわるうんちく話（その12）

消化器内科 部長 田中 盛富

テレビなどで「ダイジェスト」というと、要約という意味で使われますが、英語の「digest」には、食べ物を消化するという意味もあります。そもそもの意味は、「切り離して運ぶ」という意味だそうです。消化という過程で、最終的に食べ物を小さく切り離すのは消化酵素の役割です。この酵素の働きも、おつうじに影響します。

私たちにとって、糖質の消化（ブドウ糖の吸収）は重要な問題です。大人はお米など炭水化物に含まれるでんぷんが主食で、でんぷんは酵素によりブドウ糖へ分解され小腸で吸収されますが、赤ちゃんの場合は、母乳などから糖質を摂取します。その母乳に含まれる糖質は乳糖（ラクトース）とオリゴ糖ですが、乳糖が主成分です。乳糖はラクターゼという消化酵素の働きにより、ブドウ糖とガラクトースという糖に分解され小腸で吸収されます。しかし離乳後は、ラクターゼの働きが自然に低下することが知られています。そのため大人では、牛乳などの乳製品を摂ると乳糖が分解されずに大腸にたどり着き、乳糖そのもの、あるいは腸内細菌の関与で下痢や腹痛、おなかの張りなどの原因になることがあり、これらの症状を乳糖不耐症といいます。ただ、食生活の違いにもよりますが、乳糖不耐症は成長とともに誰にでも起こりうることであり、症状も個人差が大きいようです。ちなみに乳糖不耐症は牛乳アレルギーとは全く異なるものです。

次回も腸内細菌を含めた腸内のお話の予定です。



地域連携室からのお知らせとお願い

今般の新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として、当院へ患者さんを紹介する際、ご利用いただいています「診療依頼FAX用紙」を一部変更しております。

まだ、ご存知でない医療機関におかれましては、当院のホームページにおいて、ご確認いただくか、下記までご連絡くださいようお願いいたします。

なお、上記用紙のデータは、次の手順で出力（確認）して下さい。

当院ホームページのトップページ右上にある「医療関係者の方へ」をクリックして下さい。



開かれた画面の左上にある「医療関係者向け」をクリックして下さい。



開かれた画面の中央付近にある「＜地域医療連携＞ 診療依頼 FAX 用紙」をクリックし、出力（確認）して下さい。

【担当部署】 地域連携室（前方）

【連絡先】 TEL：087-802-1144